

## 家政学・食物学の周辺

栄養学科目・教授 謝名堂 昌信

ある一つの学問分野の内容や範囲を厳密に規定することは素より不可能であるが、その分野の教育・研究の対象となる主な課題をある程度まで絞ることは可能であり、また必要なことでもある。さて、それでは家政学の今日的課題とは何か—それは生活のあらゆる場における人と人、人と自然の相互関係・相互作用を明らかにし、以て人間生活のあり方を追求すること、とでも云うべきであろうか。

私たちは経験から、真に望ましい生活は自然と調和するものであることを知っている。たとえば、人が旬のものを好むのは自然の周期性と心身の生理的リズムの調和によるものであり、また水分子と類似の化学構造を持つ綿や、皮ふと同じ分子構造を持つ絹との接触がもたらす心地好さは自然の仲間同志の相互作用からくるものにちがいない。時おりの地方への旅行で感じることであるが、無理のない人間関係も自然を介してつくり出されるもののようである。このような真に心地好い人間関係こそ今日の私たちの生活で欠落している要素に違いないが、常々はそのことに思い至ることすらない。私たちがおかれている生活環境がそれを許さないのである。

近年の科学技術の進歩に伴う生活技術の高度化は、一面で人と人の関係を疎遠にし、人間生活の自然からの隔絶を促し、自然破壊と環境汚染をもたらした。文明の利器がもたらすこれらの一次的後遺症も深刻化しているが、不自然な生活からくる目に見えない歪みが、便利さ・豊さの中に埋れて知覚されないまま正体不明のつけとして人々の心と体に蓄積しているのではないか。いずれにせよ、人が便利で豊かな生活の追求を断念するとは考えられず、従って必然的に「便利さ・豊かさ」と「自然さ」の妥協線を探らざるを得なくなる。「この妥協線をどこにおくか」は、生活の科学的要素と文化的要素が複合した根元的な問題であり、家政学分野の普遍的な課題の一つであろう。便利な生活の代償としてのある一つの後遺症（例えば環境汚染）を解消すると必然的にそれを上回る新たな後遺症を生むこと（熱力学第二法則）を理解し、諸々の生活技術の依って立つ原理とその功罪を熟知しない限り、その後遺症を測ることは不可能である。それ故、家政学はこれらの要請に応えることをその要諦としなければならない。

以上の視点に立つと、家政学の中の食物学は、農学・工学・医学の関連分野と対比し

て、生産的であるよりむしろ分析的、応用的であるよりむしろ基礎的、自然に対して攻撃的であるよりむしろ保護的である。近年、共学が一般化する中で「なぜ、女子大学か」が問われているが、自然保護の精神こそ女子大学に相応しい教育理念と云えるかも知れない。何故なら、このような理念は女子大学の体質とよく融和し、そこにおいてこそ結実する可能性が高いからである。